

笹井伊助さん(39才)



佐渡にて船を使って商いをしております。
旅すがら仕事もし、二か月かけて参りました。

おかげ

全国から神宮へ向かった「伊勢参り」
伊勢参りは、江戸時代に大流行。日本全国からたくさんの方が伊勢へやってきました。旅する人は道中記という旅日記を記すことも多く、全国にたくさん残っています。伊助さんも道中記をのこしました。

新潟県佐渡市
新潟県佐渡市と神宮の外宮は直線距離で約420km。

伊助さんの旅をもっとくわしく

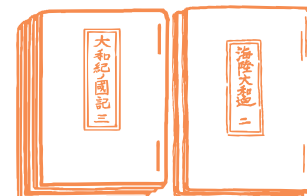
ぶんか 文化10年(1813) 笹井伊助さんがのこしたの道中記(意訳)

御師様のご家来(御師のためにはたらく人)で佐渡国担当の喜左衛門様がお越しになって、「ただいま三日市大夫次郎がここにお見舞いに参ります」とおっしゃるので、わたしたちは急いで「羽織よ、袴よ、扇よ」とあわてて服を整えて、失礼のない場所に座り、両手についてお待ちした。やがて家来をつれた大夫次郎様のご子息(息子)が現れた。まるで、貴族のような雰囲気だった。「えんろはるばるごさうけいのこと、しんじんきとくなることにそうろう」とおっしゃって、お菓子などをいただいた。とてもありがたいと思った。

参考文献：『海陸道順達日記』(法政大学出版局一九九一年)

道中記を見てみよう!

伊助さんの道中記は、思い出がくわしく記されています。
人に読んでもらうことを意識していたのかもしれません。
展示されているほかの道中記も見てください。



学芸員 太田さんのウラ話



伊助さんの記録を参考にしつつも、季節を伊勢参宮が最も多い春にしています。春先はまだ寒いはずなので、暖房用の火鉢を客室に置いています。
また、模型の時間設定は午後1時頃ですが、実は伊助さんが三日市大夫次郎の息子と会った時間は夜中です。とても広い屋敷なので、夜に移動するには、今という懐中電灯のようなものが必要でした。記録では、提灯を使っていたとされています。
その後、伊助さんは名張を経て、京都、大坂、播磨、讃岐の金毘羅山、安芸の厳島、九州の太宰府天満宮へ行き、下関から自分の家の船に乗り故郷の佐渡に帰りました。

部屋でくつろいでいたらいきなり…

場所 おんし みっかいちたゆうじろうやしき きやくしつ
御師・三田市大夫次郎屋敷の客室

時間 春(3月ごろ) 午後1時ごろ

江戸時代、伊勢参りに来た人たちは、御師という人の屋敷に泊まりました。御師は全国へ神宮のお札を配りに行ったり、神宮にお参りするために全国からやってくる人たちのお世話をしたりする人です。伊勢神宮には数百もの御師がいたとされます。三田市大夫次郎さんも、そのうちのひとりでした。三田市大夫次郎さんのお屋敷の客室で、のんびりくつろいでいる伊助さんたちのところへ、御師の息子があいさつにやってきました。

伊助さんたちはなぜ 深々とおじぎしている のでしょうか？

御師は身分が高いため、公家(天皇に仕えていた身分の高い人たち)のような服を着ることができました。お参りに来た客はおもてなしを受ける側でしたが、御師をうやまいました。

服装のちがいに注目

御師は身分(社会の中での立場)をあらわすために、客の前に出るときは公家のような服を着ました。神楽(神を楽しませるためのおどりや音楽)を行っている御師は、黒い儀式用の服を着ています。どこにいるか見つけてください。



(伊助さんの旅行計画)

- この日
御師屋敷でお参りの準備
- 2日目
外宮・内宮を参拝、
朝熊山で名物・萬金丹(薬)を買う
- 3日目
二見浦をめぐる、
山田を出発

